

## 透析医のひとりごと

### 「副会長の退任にあたって～温故知新の心境～」 ――― 大平整爾

日本透析医学会の役員を規定に従って終えてから、日本透析医会・会長山崎親雄先生の主宰する常任理事会に平成15年度から平成20年度の6年間参画する機会を得ました。これまでも研修委員会などで医会の仕事を若干はさせていただいてまいりましたが、ほぼ毎月1回の常任理事会への出席は、本会が置かれた重要で難しい立場をひしひしと感じさせてくれるもので、私にとってはまことに学ぶ点が多いものでした。

従来からしばしば、透析医学会と透析医会との違いや役割分担が、話題の俎上に載りました。前者が透析医療に関わる各職種スタッフを構成員とするに対して、後者（本会）は構成員を専ら透析医に限定しております。看護師・技士などもそれぞれに特化した専門部会を独自にもっており、透析医もまた医師としての立場で透析医療の現況や将来に対して確固たる方針を内外に示す責務があると強く感じております。

保険対応は確かに医会が担う重要な分野ではありますが、本会の活動はこれに止まらずに一步さらに歩を進めて実現可能な提言を広く透析医療に向けて行うべきだと考えます。例えば、①安定した維持透析の方策、②人材不足への対策、③高齢および長期患者に関する諸問題、④公的病院の透析部門閉鎖や私的透析施設の廃院などの実態と対策、⑤有歩行障害患者の増加に伴う送迎や入院先の確保、⑥適正な診療報酬設定、等々に対して将来を見据えた具体的な施策（提案）を生み出すためには、他を納得させる正確な資料の収集が欠かせられません。

既述の6項目は、実は、診療報酬に反映してもらいたい事項であり、逆にいえば保険点数を云々するさいには広い視野での考察が必要になるともいえる訳です。そのためには本会会員諸氏の継続的な協力が必須となります。「高い会費を支払って実効性・実利がない」とのお叱りを度々いただき恐縮に思っていました。遠慮のないご意見が絶え間なく理事会へ届かなければ果実を得られないとも実感いたします。ケネディ大統領風に申せば「医会が会員に何をしてくれるかではなく、会員が医会に何をしてくれるか」が問われているのであり、キング牧師風に断じれば「沈黙と無関心こそが問題である」ということになろうかと思えます。

医療政策の方針決定はこれまで、釈迦に説法ながら敢えて申せば、ほぼtop-downの上意下達方式でありました。これが今後どのように変革するかは予断を許しませんが、透析の現場で奮励努力苦勞しておられる会員諸氏のご意見が集約されたうえで、日本透析医会の提案に練り上げられていくことを期待したいと切望いたします。

6年間常任理事を務めさせていただき任期を終えた経験から申し上げて、会長以下、各役員の日常的な自

己犠牲的努力は大変なものがあります。会員の皆様にはこれらの一端でもご理解いただいて、今後は一層もの申す会員になっていただくことを祈念いたします。今後も医会から依頼される仕事でできることは、続けたい所存です。ホットに意見を交し合った常任理事各位を始め仕事でお付き合いいただいた多くの方々に心から深謝して筆を擱きます。

札幌北クリニック

